

# トッピング【ボーボボ】

立ち飲みペンギン

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

マキマさんってギャグに弱そう。それだけのお話。

※原作既読を推奨。

チエンソーマン十二巻までとボボボーボ・ボーボボ一期くらいまでのネタばれがあります。

※マキマさんが常にならない反応を示します。

というか、全キャラおかしなことになります。ついでに、メタネタやパロネタがちよいちよい発生します。苦手な方はご注意ください。

## 作成経緯

笛吹サイトの二次創作で一つの作品が目に残る。

読みたい。けど、原作知らない。無料サイトの立ち読みへ。チエンソーマンの魅力を知る。十一巻まで一気に読み。一月ほど「マキマ最高！」し続ける。

正気に返る。

禁断症状早川家ロス発症。救いを求めて二次創作の沼へ。「偽マキマ最高！」

件のマキマ成り代わり救済モノやほのぼの早川家に痛みが和らぐが、「でも、幸せの先には崩壊が待っているんですよね」と脳内悪魔が囁く。

再度発狂。

根本原因こと黒幕系ヒロインマキマをどうにかする作品をスコツ

プし出す。該当作ほぼなし。やり始めてエターが散見される。続きどこ……？ ごく少数のヒットで早川家推しのマキマさんや銃の魔人となったアキを救う作品を発掘。蜜の味を覚える。

しかし、取水制限がかかったかのようにそれ以降はスコップが進まず。気力のさきつちよが折れる。

自らの望みを見つめなおす。

本当に欲しいのは、チエンソーマン全キャラの幸せ。(モミアゲ除く)マキマさんをぶん回しつつ、他のキャラも存分に活躍させての幕引き。(デンパワ幸せ飯を邪魔したのはよくないと思います)

でも、作中でも底知れぬ計画性と大物ぶりを見せたヒロインの正面攻略は、無理。搦め手で行こうと決意。

大掃除中、ボーボボの単行本を再発見。そういえば、と思い至る。戦闘力では他作品の追隨を許さない国民的龍玉物語も、医者スランプの主人公相手にはまともな勝負が成立しなくなる、らしい。

よし、ボーボボを投擲しよう。同じ飛翔雑誌系列だしなんとかなるでしょ。

(いろんな意味で)どうにかなった。

どうにかなってしまった。↑今ここ。

後編 前編

目次

27 1

## 前編

カツ。コツ。

人気のない空間に硬質な靴音が反響する。

早朝、東京公安の廊下を進む美女がいた。

男性用スーツを隙無く着こなし、少年の死体に肩を貸している。

誰よりも目立つチェリーピンクの髪と恵まれたスタイルが奇妙に調和し、無機質な空間へ一層の静寂を生み出していた。

女はマキマという名を持つ。

人ならざる生き物、悪魔の一種で、内閣総理大臣と契約している人間社会の権力層でもある。

現在デンジ少年の死体から意中の相手を復活させるべく進んでいた。

「セラフイム、ビーム、ガルガリ、ドミニオン、ヴァーチエ、パワー、プリンシ、エンジェル」

頭のない者、両手がない者、胴体が消失している者。服従の姿勢を取る者。

一人ずつ読み上げるように天使の名を冠する悪魔の死体が並ぶ中に行く。

中には死体の少年と親しい悪魔もいた。

けど、もう誰も動かない。

「皆あなたのために命を懸けて戦い抜きました」

「私も彼らも、あなたの復活を心待ちにしています」

突き当りの扉を開け、玉座に彼を据え付けようとした彼女に待ったを掛ける者がいた。

「おふざけはそこまでにしてもらおうか」

「私は至って真剣ですよ」

背後からの聞き覚えある声。

マキマは足を止めて、険のある声を出した。来る時が来たのだ。彼女は彼女が人間の味方から外れたら、マジバトルすると示唆していたのだから。

先手は彼の側。

マキマの側面にある壁が轟音とともに吹き飛んだ。咄嗟に顔面を腕で庇った彼女は、視界の端に自身の背後にいるスーツ姿の公安職員を認めた。

五十代に至り今だ現役。殉職か転職が経歴の最後に並ぶ公安デビルハンターで最強を自負する実力者。

「岸部さん。やはりあなたですか」

身を低くして衝撃から身を守っていた男はゆつくりと体を起こした。だるそうに長身を伸ばす。それだけで、鍛え上げられた筋肉の壁がそそり立った。

「全く、俺はただの人間だと言っていたんだがな」

「あなた毎撃つとは、随分信頼されていますね」

言外に指揮官に位置する己すら駒扱いする危険性と覚悟を指摘する。油断ならない相手だった。

「まあ、契約した悪魔が悪魔だったからな」

「その悪魔は私に敵う代物だとも?」

「さあ? お前対策がにっちもさっちもいかなくてな。やけくそになって繁華街で飲んでたら意気投合して契約していた悪魔だし」

最強の悪魔狩りにして、酒浸り。頭のネジがちぎれ飛んだ男は、彼女の警戒を知ってか知らずか飄々とした態度でうそづく。

「おふざけで契約する悪魔なんて聞きませんよ?」

呆れの口調はポーズに過ぎない。ホラでも事実でも彼が言う内容は無視しがたい。岸边は女好きが高じて世界殴り合い選手権優勝候補の女傑に十年近く言い寄った鋼のメンタル持ちだ。殺るなら殺る。マキマは今、猛禽に狙われた生き物と同等の立ち位置にいた。

「俺も夢だったんじゃないかと思っている。だが、見ろ」

岸边は顎をしゃくった。

「あれは?」

吹き曝しになった窓から向かいの建物が見える。屋上には人影が十ほど。思い思いにポージングしている。公安こそ正義の味方と使命に満ちた佇まいが遠目にも知れた。まさに勇敢なる者たち。

だが、指揮を取る岸边は浮かない顔を崩さない。

「お前本当に躊躇も容赦もないからな。皆命が惜しいから、対策部隊揃えるのにえらい時間がかかった。おかげで集まったのはあんなのばっかりだ」

あんなのと評された連中が動き出す。無駄に洗練された素早い動きで、位置取りを決めると一番手が滑り出る。

青い姿がポーズを取った。実は蛍光塗料のボディペイント。

「青けりや何でもいって思うなよ！ 癒しのブルー！」

ビシッと、決めた男の影から、二番手が側転してくる。流れに逆らわず横回転に切り替えると、勢いに乗せ、両手のバケツから緑色の粘液をばらまく。

「子供の時遊んで処分に困るスライム色！ 粘着のグリーン！」

回転を止めた彼と背後に入れ替わるように登場した、変身ヒーローでも何でもないコック姿のおっさんが、中華皿に麻婆豆腐を盛り付ける。

「お尻から出すときツライ！ 唐辛子のレッド！」

そして、マイク持ちのスーツが革靴の踵を鳴らして前列に出て宣言する！

「以下略！」

テンポ優先！ 長い登場シーンなぞ不要！

「真面目に紹介しろ！」

こいつ切り捨てやがった。憤懣やるかたない所業に、ここぞとばかり気合を入れていた後ろの出待ちヒーローたちがエネルギーの行き場を求め、マイク野郎を滅多打ちにし出した。

「ぎゃああああああ」

「ほらな」

岸边隊長は見てられないとため息を付く。集まった面子の内実は彼女に臆さないことのみで統一されている。人格などは二の次だった。

マキマは問うた。

「あれ、私のせいですか」

「そうだといいと思っっている」

最強のデビルハンターは目も合わせない。責任逃れだった。

屋上ではマイク野郎が黄金ソバットで反撃し、誰かが肩をぶつけ、拳で返答。乱闘騒ぎに発展し、醜い争いが始まっていた。

「放っておいても自滅しますね」

「ああ」

「……認めるんですか？」

常に悲劇へのカウンターを準備してきた彼らしくない。意外な返答に一抹の疑念を抱く。

だが、相手は既に彼女に対する王手を描いていた。故の達観。仕込みは済んだ。後は始末するのみ。

「負けじゃない。勝ちを、だ」

意味深な一言を残し、足元が崩れた岸边は落下していく。

「……あつけない」

蟻地獄に飲まれた虫けらの末路を見送ったかの如き、興味なさげな一言がぽつりと残った。

そうこうしているうちに部隊の連中が脱いだジャケットを振り回して奇天烈に踊り出す。

「チュパカブラチュポアカブラララ」

「カブカブカブ。抜けたー！」

訳の分からない文言とともにコンクリの屋上からエンジン付きの噴霧器が出現する。農作業で消毒液を一带に散布するタイプだ。

対策部隊がスターターを勢いよく引く。途端起こる大爆発！ 天まで焦がす爆炎の中からアフロの大男とトゲトゲが痛そうなオレンジ色のイガグリが飛び出してきた!!

「おあつちやああああああ」

「燃える燃える！ 俺いい男になっちゃう！」

「おら、その火よこせ！」

「ああん私のこんがりボディがあ」

二人(?)はテンションと比例して燃えていた。スタントマンがやる演技ではなく実際に燃えているリアクションだった。常人なら、炎



に寸断され、呼吸不全になるのにもがく勢いは衰えない。それどころか戦隊？ 連中に混じって立ち上がると何やら口上を述べた。

「全治一秒！」

「けが一生！」

「ハジケは永遠!!」

いつの間にか全身に回っていた炎が消え、五体満足になっている。今は訳の分からないことを言い、召喚した連中にポージングを教えてもらっていた。

マキマは蜘蛛の悪魔の転移能力に似た唐突な登場に意識を締め直す。

「あれは一体」

「ハジケリストだ」

「誰ですか」

疑問に答えたのは、でっかい鼻毛だった。バナナボートのボート部をオレンジの鼻毛にした代物におっさんの手足と顔、それにサンダラスをつけたうさん臭い輩だった。

「俺はキング鼻毛。人は俺を……「ぱん」……ぶぼっ」

マキマはとりあえず力場を打ち込んで粉微塵にした。

鼻毛野郎の粉末が舞い散る中、ふと指先に目線を留める。

「私の思考はこんなに短絡だったかな？」

自己に自信が持ちづらい。奇妙な自覚があった。

独り言に酒焼け声の渋い解答があった。

「ハジケリストの悪魔の能力だ。全てがバカになる」

「そんな悪魔は消えたほうがいいと思いますが」

端的に切って捨てる。マキマはつまらない映画の存在を許容しない。おバカも同列の扱いだった。

「いるから我慢しろ。それにしても、キング鼻毛を引き当てるとはい運をしている」

そこまで会話してようやくおかしいと思ったマキマは声の主に尋ねた。

「岸部さん。死んだのでは」

「五体満足だよ。ちよつとはさまっているけどな」

「ちよつと?」

岸辺はマキマの足元、壁だったコンクリの砕けた山の中から頭だけ出していた。

「なんというかたくましい雑草の気分」

恍惚としているのが分かる真顔で言う。偶然差し込んだ日光が五十代の肌には陰影を作る。光合成を楽しむかのように「ふう」と一息ついた。

「感想聞いていません」

マキマは思わず突っ込んだ。

「それよりほら、キング鼻毛を早々に殺るから、来たぞ」

「おらあああああ」

「キング鼻毛を葬りやがってアターツク」

火葬用の棺桶を担いだアフロとイガグリが廊下の先から走ってきた。

「二年使用」

マキマは動じることなく、虚空に出現させた天使の輪っかからエストックを発射し、棺桶を貫かせる。

「うおっ」

爆散する棺桶。中に詰まっていたキング鼻毛も中空へ飛び出す。

「むにゃむにゃ。あと五分」

銃撃痕などどこにもない。実に健やかなキング鼻毛が寝言を言いつつ、パジャマ姿で壁の穴へダイブした。

「キング鼻毛エエー!?!」

イガグリが両手を口元に当て大声で呼ばれる。

中空でぱちんと鼻提灯が割れた鼻毛野郎からのんきな返答があった。

「お土産は芋羊羹で頼む」

「任せろ!」

アフロの大男がグッドサイン。親指が光る。

落ち行く鼻毛とアフロたちは死ぬってなーと言わんばかりの能

天気なやり取りをしていた。

「いったい彼らは何なんですか」

マキマは少々混乱してきた。

故人の葬送をダシに突撃してきたと思えば当人？ はすやすや熟

睡するくらいに元気だし、お土産つてなんなの。

本当に意味がつかない連中だった。

「ハジケリストだ」

「それはさっき聞きました。知りたいのは内容です」

「俺たちが答えてやろう」

岸辺の背後に先程のアフロとイガグリが陣取った。腰に手を当ててキザにポーシングする。

「俺はボーボボ。ハジケリストの悪魔！」

「俺は首領。パッチ。同じくハジケリストの悪魔！」

「そして！」

「ハジケリストとは！」

「アホとかバカのことだ」

「おいひげ！」

「だってホントのことなんだもん」

「もん、ってつけるなもん、って」

「おっさんが可愛い子ぶってもきめえんだよ」

良い所でセリフを掬われた悪魔どもは激昂した。なぜか九十年代ヤンキー風の学ランを一瞬で着こんだアフロとイガグリが岸辺を足蹴にし出す。

世の中には気まぐれな石の悪魔や契約者を殺害するゾンビの悪魔がいる。悪魔との契約は命がけだ。

「うおっ？」

だが、いつの間にか靴底が踏みつけていたのは穴っぽこになっていた。

岸辺は別の隙間から顔を出すと首を回した。

「ぬるい」

最強のデビルハンターたる威厳を低みから見せつける。

「モグラかこいつ!？」

「百点はやれんぞ」

「上等だ! やってやんぜー」

がれきの隙間を出たり入ったりする岸边と、脳天をクラッシュしてやるぜと木槌を振り回す二人が、どんがらがつしやんと暴れまわる。ただでさえ廃墟一步手前の公安内部がどんどん荒らされていく。

「これ、私がいる意味あるんですか?」

置いてけぼりになったマキマはつい言ってしまった。

ギャグの権化共に正論を。

「甘ったれんなー!!」

「マギツ!？」

そして順当にボーボボから平手打ちを喰らい、女にあるまじき擬音を口から放出しながらきりもみで吹き飛んだ。

マキマは尻もちをついていた。感情が表層に現れにくい彼女には珍しく、啞然とした表情がありありと表れている。

「……見えなかった」

人類最強でも斬られたことに気付かせない速度域の彼女でも知覚すらできなかつた。現世にいる悪魔最強格たる銃の悪魔ですら秒殺できるだけの観測能力があるというのに、黄色のアフロは警戒を掻い潜ってきたのだ。

「お嬢さん。ハンカチをどうぞ」

「蛇。尻尾」

「へぶう」

高速回転する脳内を纏めきれない彼女に、人型のプルプルした物がハンカチを差し出してくる。全身青色で気持ち悪い姿をしていた。岸边たちはまだ戯れている。手持ち無沙汰なので、召喚した蛇の悪魔の尻尾で引つ叩いておいた。

「これ、イチゴシロップ?」

戦利品のハンカチで汚れを拭くとますます疑問が湧き出てくる。口から出ているのは血ではない。ちよつとさらさらしたかき氷にかける甘味料だった。

「力がない代わりに、相手の調子を狂わせる悪魔ですね。さながら踊りに巻き込み、全てをうやむやにするような」

「全然違う」

「いい加減出てください」

追いかけてこは飽きたのか、一所を終の棲家と定めた頭だけ岸辺がやはり表情が死んだままに否定する。

彼の後ろでソーランソーランそいやーさっさーとあふろとイガグりが法被着て踊り狂っている。祭りの山車から人型のところてんがにゆるつと這い出す。気持ち悪い挙動だった。

「あいつらが本気出したらお前もうまともじゃいられないぞ」

「今でも随分変な状態だと思うのですが」

血がシロップとすり替わっていた支配の悪魔は胡乱気だ。

学芸会か高校の出し物めいたバカらしさが漂いつつある。

悪魔は恐怖で駆動し、殺戮で充足する。そいつらを上回る狂気でもって根切りを目論む公安にふさわしくない空気なのは確かだった。

だが、岸辺はやはり適度に肩の力が抜けた態度を崩そうとしない。

「降参しておいた方がいいとおじさん思うけどな」

「手加減で何とかなると思われているのは心外ですね」

割り箸を鼻に差してドジョウ掬いやっている連中をくだらないため息でもつきそうにしながら扱き下ろす。相手の力量を計り、見下す行為をトリガーに全てを掌握する彼女にバカは致命的だ。

だが、顔面傷だらけの強面おじさんは、マキマが予想すらしない方角から攻めてきた。

「あいつらが本気を出していないのは簡単だ。お前がチェンソーマンのヒロインだからだ」

「えっ。私がチェンソーマンのヒロイン？」

「ああ。ヒロイン集合水着絵にお前いたし、間違いはない」

「ホントですね」

岸辺が出してきた少年ジャンプで麦わら帽子を被った自身の絵を発見したマキマは薄笑いの中に喜色を滲ませた。

ハジケリストにとって、他の漫画作品からキャラを引っ張るくらい

は持ち技の一つに過ぎない。ボーボボのハレクラニ戦では遊戯が高橋先生画で出演していたし、メタ情報付きジャンプくらい読めて至極当然だった。

「ヒロインをぼこぼこにするのは読者がうるさいからな」

「読者なんているんですか」

「お前ホントそういうところだぞ」

何でもかんでもシリアスすれば、面白くなると考えるなよ。岸边にけなされ、マキマは正気に返った。

「先程までの私は随分と間抜けだった気がします」

「俺は昨日からずっとだ」

「どうしようもありませんね」

「契約の影響だろう」

人格にまで影響を及ぼすあたり、契約者をゾンビにしてしまうゾンビの悪魔とどっこいの危険度だった。

だが、これから討伐するなら契約云々は考えなくてもよい。

一方的な処理になるだろう。岸边たちにはヒロインたる彼女を積極的に害する余地がないのだから。

「言質は取れました。ハジケリストの悪魔は私に危害を加えられない」

「ところがどーん」

「ヒロインをなめんじゃないわよー！」

「ミッッ」

無罪を勝ち取った被告のように得意げな態度も一瞬のこと。

食パンを加えたセーラー服アフロとオレンジウニにひき逃げされる。

両者ともチークと口紅まで決めた勝負スタイルだった。ヒロイン指数は当然マイナス。

そんな物体Xに衝突されたマキマは、ミイラが遠心分離器にかけられたようなみつともない空中散歩をした。

「ハイロール」

「ああああああああ」

「餡も仕込もうねー！」

「アツツ熱い！」

着地点で餃子店を開業した首領パッチが、人間サイズの皮に彼女を包むと、すかさず天の助が餡を上から垂らす。マキマは奇祭に巻き込まれたTVリポーターさながら良いリアクションでバタついた。

もがく彼女を俵担ぎしたウニ野郎は、中華テーブルに品を叩きつける形で提供する。

「ハイ試食アーレ！」

「こんなん喰えるか！」

ナイフとフォーク両手にワクワクしていたボーボボは巨大な卓をぶったたく。

「デンジ君なら食べるのに！」

チャイナ首領パッチはスリットが良く見える角度を狙いながらの字を書いた。

「愛が！ 足りないんだよ！」

怒りのアフロはエセ中華娘目掛けマキマギョーザをぶちまける。

「あうあっ」

ひらりと躲された特大餃子は衝撃で皮が破れ、中身が転がっていく。一連の流れが終結し、ようやくと解放された彼女はほかほかと湯気を上げていた。

廊下の隅つこにニンニク塗れで転がるマキマは、向かいの屋上で焚火する戦隊連中が焼き芋を焼いているのを見た。

「もうじき焼けるべ」

「悪魔と戦わず金だけもらえるって最高」

「誰かバターない？」

「マヨネーズこそ王道！」

「生姜焼き、生姜焼き」

五百キロ先まで視認可能な彼女にはコスプレ連中の会話を唇から鮮明に読み取れる。

物凄く平和ボケしていた。焼き芋パーティーだけではない。鼻提灯が風船サイズまで膨らんでいる輩までいる。シエスタだった。

瞬きをしたら、まつげからネギの欠片がぼろりと落ちた。

今マキマはなんだか凄まじく不愉快な気分だった。思わず鬼札の一つを切るくらいには理性が焼けていた。

「公安退魔特異五課出動」

悪魔を心臓にした不死身の部隊。武器モチーフの能力を手繰る殺戮の手練れ達。全員がマキマに好意からの忠誠を誓う、おそらく地球上でも屈指の悪魔狩り集団。

のんきに芋がどうたら言っている連中には過剰戦力だが、不愉快な光景を消せるならお釣りが来る。ざつくざくのちやりんちやりんである。

しかしいくら待っても来やしない。念のため近くに待機させていたはずなのに、感じる位置は随分と離れていた。

動物の視界をジャックして探す。

「並んで並んでー」

「最後尾はこちらー」

「商店街恒例、豪華ガラガラくじだよー」

がらがらがら。

ガラガラくじだった。行儀よく変身した異形たちが半券を渡して回している。全員彼女が招集を掛けた特異五課の人員だ。

なぜか遠くの商店街へ移動した三馬鹿が仕切っている。

「えっ？」

自分の命令は？ 私支配の悪魔なんだけど。

マキマは能力が手元を離れた有り得ない感覚に戸惑う。

そんなでも現実進む。

コロんとオレンジの玉が排出された。

「ハイー等。旅行券ー」

「やったー」

頭が投擲爆弾の形状をした少女が飛び跳ねて喜ぶ。

「うんうん。じゃあ、逝こうかー」

「ハイ？」

彼女は気付けば巨大なロケットに括りつけられていた。



「二等は宇宙旅行！ 名付けて『ドキドキ！ 宇宙は呼吸できないってホント？ チェンソーマンの代わりに確かめてこよう！』片道切符だよ！」

「それ処刑と何が違うの！」

爆弾ガールは鋭い口の歯を剥き出す。逃れようとするも謎縄は悪魔の脅力でもちぎれない。ギチギチと軋むだけだった。

進行役のトゲトゲはとても申し訳なきそうだったが、唐突に目と口を真四角に開く。ピー、ガタガタと一昔前のファックス音が喉の奥から出てきた。

「ごめんねこれデンマキなんだ。作者は三角関係とか修羅場書くの無理って早々に諦めたんだ。それ以前に君とギョーザさん碌に会話していないから資料ない！ って発狂してこの展開を繰り出したんだ。」

ここまで語っておいて、言い訳じゃないけどデンレゼも嫌いじゃないんだ。ホントなんだ。今日はデンマキの気分だっただけなんだ。以上、どこかから電波を受信した首領パッチでした」

表情と正反対に滑舌は最高だった。唇に油でも塗ったみたいな早口だった。意味を理解するのに困るくらい高速だった。

そして、最後に小爆発を起こし白煙を吹き上げた。

「どういふこと!?!」

元作業員の彼女ですら怒涛の展開についていけない。

「ファイヤー！」

ぷるぷるがマッチを擦り、導火線に勢いよく炎を走らせる。

少女は焦った。

「いやちよつと待って！ ねえ、なんで、私これからデンジ君と二道でランデブーするのに！」

約束の日から時間が止まった少女は儂い恋を成就させようともがく。だが、残念。ここにいるのは悲劇を喜劇に塗り替えるハジケリストどもだ。

「だからマキデンなんだ。デンレゼはここまで」

再起動したオレンジが舌を回しに回す。壊れかけの家電製品のように挙動があやしくせに、口調だけしっかりしているのが憎らし

かった。

「ホント何それ!？」

「あ、二道店長から伝言で、新しいバイト雇ったから、風に吹かれてきな、だって」

「いいこと言うねー」

導火線が尽き、火薬が真っ赤な燃焼反応を始める。

「私貿易風とか偏西風に吹かれそうなんだけど！ いやあああああああー」

「さすが爆弾の悪魔。いい爆発具合ですねー」

「突っ込みもいい炸裂ぶりだったなー」

上空へ小さく消えていく姿に敬意を込めてところてんとイガグリは見事な敬礼をした。

「えええ」

マキマは視界ジャックを止めた。視界の端では見事な噴射炎で空を駆けていく飛翔体が一つ。彼女だった。いや、後追いで五課の人数分撃ち上がった。あのくじは当たりしかなかったらしい。

「なあ、俺もくじいつてくるわ」

「どうぞお好きに」

花火にでもなんでもなっつけてくれればいい。マキマはちよつと投げやりになって来ていた。

「飴ちゃん貰った。はずれだって」

「はずれあったんですか」

岸辺は姿がぶれたと見た次の瞬間には口いっぱいに子供用棒飴を啜っていた。

マキマは悪魔の力を用いるでもない瞬間移動も、またモグラをやり出した岸辺にも指摘はしない。

くじのほうしか驚かなかった。慣れてきている証左だった。本人的には適応してきている事実が何より嫌だった。

マキマは敵手達のペースがどうにもつかめていない。しかし、まだ余裕があった。

彼の復活があるからだ。

迂遠な計画を以て今日に漕ぎ着けた労力が期待値を跳ね上げ、まともな思考を保証していた。

「よう、さんざん振り回してくれたな」

「パンティ三枚じゃ足りねえぞこら」

「ぬのはんかちキャンペン中！　あなたも一口どうですか！」

ヤンキー歩きで迫るアフロ、なぜかマキマのパンティを頭に被り、棘にも二つひっかける卑猥なイガグリ、そして丸眼鏡とお弁当売りスタイルで、箱いっぱいの変なハンカチを売り込むところてん。

三体の悪魔が怖いもの知らずなのか再び挑んでくる。

支配の悪魔は懸念事項から片づけることにした。

「とりあえず下着返して下さい」

「もう出荷したからダメ」

札束を数える首領パッチの後ろで運送スタッフが段ボール箱を運んでいく。階下でトラックに積み込まれた。このご時世なんでも売れるのだ。いいか悪いかはともかく。

「助けてチェンソーマン……ッ！」

もはやこいつら対応不能。

決を下したマキマは、いまだかつて下着を取り戻すのに地獄のヒーローを呼んだものはいないだろうかと、どこか遠くへ思考を飛ばしながら英雄を呼ぶ。

やはり例によって、トラックが豆粒みたいになっても英雄はこない。

宿主の少年の死体はある。胸元に缶詰空けたみたいな穴が開いていた。

もしかしてと見ると屋上で焼きイモを食っている面子にデカい影が追加されていた。

腹から飛び出した腸のマフラーを巻いたギザギザチェンソーの痛そうなヤツ。

悪魔の大半に恐れられるチェンソーマンご本人だった。腕から伸びる二本のチェンソーを器用に使い、一麦芽糖《サツマイモ》のでんぷんが分解されたもの。なんか甘い》を摂取していた。

情緒を乱したマキマは咄嗟に叫ぶ。

「チエンソーマン!? 芋より私食べてください! 美味しいですよ!」

チエンソーマンはイガグリの親戚みたいなボデイをマキマに向けた。芋のふつかふか黄金色と、なんかニンニクくちやいメスを見比べる。食指も動かん。

「ヴァー」

いらね、とそっぽ向いた。

「どうして!」

すんごくつれない愛しの彼にマキマは拳で床を叩いた。衝撃で壁のコルクボードが外れ、マキマの後頭部にチョップをくれる。

「新しくできたバーガーイケるってよ」

「メチャウマバーガーだっけ」

「ヴァンヴァーヴァー!」

「お、悪魔さんも行くか」

チエンソーマンは公安メンたちと肩を組んで去っていく。

「待ってええええ!」

ボードに止められていた啓発ポスターが剥がれ、マキマの視界を上からゆつくりと狭めていく。

迫る暗闇から逃れようと手を伸ばすも、彼は取らない。

腐っていないバーガー楽しみだな。そんなことしか考えていなかった。

『悪い悪魔をやっつけよう!』

支配の悪魔の未来を塞いだポスターでは、チヨンマゲ貴公子が澄まし顔で狐を呼び出すポーズをしていた。

「ヴァー!」

「ひいひいらっしやいませええ!」

東山コベニは危地にあった。

ファミリーの平手打ちなる意味不明儀式がある黒色バーガーショップで助けてと内心で救援を求めたら、何か悪役ヒーローみたい

なチエンソーが生えた人型悪魔が来店したのだ。

「頼むわー」

「バーガー一つ」

「俺照り焼き」

そして、退治するでもなくトゲトゲ悪魔と仲良く席へ着く公安デビルハンターたちが混乱に拍車を掛ける。

イカれていないと悪魔狩りは勤まらないというけど、やめて正解だったと、恐慌に駆られ、同僚を刺殺しようとしたり、銃撃犯を包丁一本で圧倒したりした彼女は思った。

だが、狂気は輩とも言うのか。コベニは不幸に好かれているらしい。

「私が行くんですか？」

最初に挨拶？　されたのが良くなかったのか、矢面には彼女が立つことになっていた。

「君ならできるー」

他の店員たちは流れに身を任せる構えだ。

勤めて日の浅いコベニに割りの合わない業務が回るのも社会の習いだった。

既に犠牲は出ている。悪魔来店時、咄嗟に「デビルハンターを呼ぶ……」まで叫んで首を落とされたマスコットキャラの頭が店内に転がっていた。

気付いたらウインクしたデイフォルメバーガーの頭に、永遠の悪魔みたいな手足が生えてペったらペったら歩いているけど、なんなら胴体は肩口を支点にひっくり返ってブレイクダンス踊ってるけど！  
それでも！　デビルハンターの経験があるコベニが、カウンターに避難した店員たちのために、注文品を届けに行くのが筋だった。

もうやめようかな。

シナプスがストレスで死滅するのを感じながら注文をトレイに載せて、お客さんの下へ。一歩一歩が死出の旅路と遜色ない。カップのドリンクが大波小波どつぶんたつぶん暴れ回る。

「あっ」

タツチダウン寸前で、極度の緊張で足がふくらはぎに引つかかる。コベニの脳内で蛇の悪魔のくねる体を華麗に走り抜けた記憶が蘇った。

おつかしいなー、運動得意なはずなのに。

だが、足がもつれては十全のパフォーマンスは望めない。

こけた。

バーガーも、ドリンクも、ポテトも新春豆まきみたいに飛び散る。着弾予想地点には例の悪魔さん。

コベニは顔面の血の気が引くのが分かった。

わー、これきつと死んだことにも気付かずミンチになってパティに挟まる展開だー。B級染みた終わり方は嫌だったなー。そんなことを思った。

「入れ食いや入れ食いや」

「こけし祭りじゃー」

「おまるもってこいおまるー！」

しかし、新人さんやっちゃいましたーなバーガーセットをお届けする寸前で、ドジョウ掬いのアフロが、両手にこけし持ってスピンドルするオレンジウニが、アヒルさんおまるを胴体に装着したぶるぶるした青色人型が、ポテトを見事にさらい、ドリンクを空中で吸い切り、バーガーは腰元のおまるへ流した。

「あ、後片付けよろしく」

食い散らかした後、炭酸臭いげっぷをしたオレンジがほざいた。

「何ですか、あなた達!?!」

コベニは驚愕した。

食べ物爆発事故を未然に防いだ英雄なのか、空中無銭飲食なる奇天烈な犯罪行為をしたのか判断に困る連中は、言動からして得体が知れない。

命を拾った安堵に浸るべきか、現状の理解を敢行すべきか。現実の入力内容と常識の乖離が大いに混乱を齎す。

しかし、怯える脳の片隅で小悪魔コベニがすかさずインターセプト。こっそり囁く。

多分ここでこいつら責めれば、こけかけたのはチャラになる。水流し！ みつずなっがし！

この思考を単に現状整理できなくてあっぷあっぷしているとか言っではいけない。

彼女だつて必死なのだ！ ちよつと小狡いだけで！

「ヴァンヴァーヴァー!!」

「あ！ ただいまあ！」

そして当然のごとくズルッピ実行前に速攻でへたれた。

「チェンソー様は全てに優先するのです」

「何やってるんですかマキマさん」

カウンターへ引き返そうとすると、客席にはサメ頭の魔人みたいなことを訳知り顔でいう元上司がいた。首領パッチが吸い切れなかったコーラの紙コップが頭に被っており、不格好なファストフードキヤンペーンガールみたいになっていた。

「とりあえずこれ使ってください」

「ありがとうございます。コベニちゃん」

完璧を擬人化したような人でも失敗はあるものだ。優しく悟った風なコベニは、甘い雫を髪先から滴らせる彼女にそつとハンカチを差し出した。

地獄の配達中だが、物憂げな彼女を放置するのも気分が腐る。一休みならアレだと、元上役の鬼畜を知らない彼女はアイコンタクトをカウンターに送った。任せておくと、厨房スタッフは親指を立てた。コベニも半泣きばかりの女ではない。気遣いも上手な学べる女なのだ。「どうしてええええええ！」

そして、マキマとの会話で適度に弛緩したコベニは再チャレンジできっちりセットを並べ切ったものの、チェンソーマンの脳内デンジが唐突に『女とデートとかしてみてよなア』と呟いたが為に、内臓マブラー一本釣りされ、半泣きになった。

ひんひん馬のように嘆くコベニの背後では青色人型とバーガーヘッドウイズ手足が主食の座を賭けて不毛な諍いを始めていた。

「貴様は……！」

「よくも我が眷属をおまるに流してくれたな」

「ところでんこそ生ける者全ての主食となるべきだからな。手心など加えなかつたさ」

「ほぎけ。水分過多のクニヤクニヤが」

「ガーリックとソース塗れの不健康食品が何かいつてらあ！」

「ああ？」

「やんのかこら！」

胸倉を掴み合い、眼力をぶつけ合う。今ここに食の王座を掛けた争いが始まった！

「あのー、気になるんですけどー」

刀剣のように「ぬ」文字入りハンカチを使役するところだと、頭と体、二対一体のコンビネーションで青色の悪魔を追いつめるバーガーマスコット。

店員として、それ以前に人として一言申さねばならぬと、コベニは控えめに店内への帰還を申し出たが、返答はいかんとも解釈しがたい「ヴァ」の一語のみだった。

マキマは世界の終わりを告げる先触れだが、恐ろし気な役割に反し、人並の感性を持っている。楽しい雰囲気でお酒を飲めばおいしいと思うし、怖い人に囲まれる会食は味が分からない。タバコは苦手ですついでにむせてしまう。

特に映画は十本に一本しか出会えない良作の為に、映画館を丸一日ハシゴできる。そして、かつてたった一本の映画に人生を変えられた。

支払いを済ませたマキマは、ビルの屋上で再度変な一行と対峙していた。

憑き物が落ちた彼女は常の無表情を取り戻し、内心を計らせない。バーガー店でコベニが密かに供したコーヒー。単なるワンコインのスマールサイズ。苦みばかりが舌を刺激する代物が、彼女に一つの気づきを与えていた。

「大体分かってきました」



「ハーン？ びぶっ」

下からヤンキー睨みしてくるイガグリ野郎を踏みつぶす。

「真剣にふざければいいのですね」

一本の映画ならぬ一杯のコーヒーが彼女に開き直りを与えていた。  
馬鹿は馬鹿でしかない 不味いものは不味いが、そのまま飲み干せばよい 吐き出すほどではないのだと。

もともと、支配の悪魔は相手に応じた対処に長けている。いかなる無作法者でも、求めるなら対話を試みるスタンスだ。こいつらの言語はバカとアホの反復横跳びにある。屈服を試みるなら相手の土俵で完膚なきまでに。

「決着をつけるか」

終わりの時を予見したか、ようやっと地面から這いだした岸边がビルを挟んで向き直る。首をコキコキと鳴らした。横で雰囲気づくりなのか天の助がギロをガリガリやっていた。

「ヴオヴオレー！」

「ひいひいひいひいひいひい」

更にビル下の娯楽スペースでは、哀れなバーガー店員が、ダンスミュージックの筐体で、ロボットダンスもかくやのキレツキレのパフォーマンスを披露していた。

「ばん」

「ぼっ！」

最初は鬱陶しいところてん。

「ばん」

「みよっ」

次に復活した丸トゲ小僧。

「ばん」

「がはあっ」

最後に悪魔たちの中心となる大男。

マキマは把握した法則をなぞる。ちよつとあざとく、けれども容赦なく、指鉄砲で致命の一撃を叩き込む。最後のバーンはとくにかわいらしく、ボーボボが女性に甘い点を見抜き撃ち込んだ。

銃の悪魔の二十パーセント以上から捻りだされる力場は、軽く打ち

出すだけで、魔人の胴体を消滅させ、マンションの壁を陥没させる威力がある。

「ばんばんばーん」

ダメ押しの連撃。

「ぐはあああつ」

不可視の質量に殴打され、ボーボボたちは口から鮮血を吹き出した。天の助も構成物質的にあり得ないのになぜか吐いていた。首領パッチは知らん。

ボーボボ一行は打ち上げられた魚状態で呻く。

「ぬのハンカチガードが効かない……！」

「懐のマンゴーが砕けた……！」

「アフロで雛が孵った」

「マジで！」

「ちよつと見せて」

「いやそれ、ただの布」

ちやつかり物陰に避難していた岸边の冷静な指摘は風に流された。マキマは油断しない。バカどもの耐久性は異常の域だと悟っている。

「伏せ」

「ぐは」

「うぼ」

「すおつ」

何をやろうとしたものか、三人官女スタイルで逆襲を試みた三者は、支配の悪魔の一言にバナナで滑ったみたいに面白くすつ転ぶ。

「しゃちほこ！ ねえ、しゃちほこ」

諦めの悪い首領パッチが、エビぞりでネタを披露する。あわよくば、バカらしさで相手の隙を生じさせる構えだった。

だが、もはや悪魔は相手のペースをなぞりつつあった。

「凄いですね」

しゃがむと小さなオレンジと目線を合わせる。

「だろ！ 今なら首領パッチグループ会員カード無料贈呈中だぜ。俺

と会える特典付き！」

対象は、敵手の狡猾さにも気付かず、保母さんに褒められたかの如きシチュエーションに思わず得意げになった。鼻など擦って、ファンの獲得に躍起になる。

勧誘対象は「うーん」と顎にほっそりした指を当てた。

「私はもう特定の相手のファンなのです。ですが、折角の好意を避けるのも礼を欠きます」

折衷案です。悪魔は提案した。

「私に全て捧げてくれませんか？」

あなたが被支配層ファンになればいいのですよ。

「ハア？」

首領パッチはうつとうしき全開の態度にデイフォルメハムスターみたいなつぶらな瞳をのせた。

かわいさうざさ全開のオレンジに、マキマはあくまでにこやかに下知した。

「これは命令です」

「捧げる」

真顔で宣言後、イガイガは顔面パイを受けた芸人のようにぶっ倒れる。

受け身も取らないのは尋常ではない。

ボーボボは純粹に心配した。

「首領。パッチー！」

「あなたたちもです」

「捧げる」

二つの物体が倒れる音が重なった。

「終わりました」

一仕事終えたと肩の荷を下ろした表情をした途端、人を呑み込める巨大プリンならぬ巨大寒天がマキマを呑み込む。透明な内部に閉じ込められた彼女の視界では、ボーボボのアフロから出たムダ毛が、やはり無駄に回転するイガグリの火花に引火するのを認めた。

スチールウールに着火したのに似た爆発的な燃焼が起こる。寒天

も膨大な熱に沸騰し、四方に弾けた。

「馬鹿どもの何もかもを引き受けられると本気で思っていたのか？」

コンクリに沈降し、被害を免れていた岸边が浮かび上がってくる。たかが一個人で底知れぬ無軌道ぶりを御せるならハジケリストなる呼称は浸透しえなかった。

彼らは英雄だ。かつてパゲメンなる丸刈りとラーメン接着の阿保所業を敢行した強大なる帝国を砕いた実績がある。世界を束ねるマキマですら、支配の及ぶ手合いではない。

ビルの屋上にめり込んだ岸边ヘッドの前に三つの影が終結する。

「全てを捧げました。だから戻ってきましたよん」

首領パッチは人差し指を両手それぞれに立ててヒップホップのノリをしていた。顎を尖らせ、どことなく癩に障るポーズで「チエケラ！」と気取っていた。

「時の流れを決めるのは俺たちなのさ……」

天の助も平常運転だ。ハンチング帽を被って懐から取り出した懐中時計の蓋をキザに開け閉めしていた。

「俺のアフロが五分の一も減った……!」

ただ、ボロボボだけが成鳥の巣立ちとともにカットケーキの残りみたいになった髪型に涙を零していた。

もはや定例となったペース破壊。濁流のようなバカナタが相手の許容量を喰い荒らし、血反吐に沈める。

「私は日本国総理大臣との契約により、損傷全てを適当な日本国民の怪我、病気に変換することができます」

だから、湯気が立ち込める中から彼女が平然と現れたのは彼らにとっても予想外だった。

これまで戦った連中には、ハレクラニ、ギガといった無駄にシリアスな連中も居たにはいた。だが、正面からボケをまるっと引き受ける手合いは中々ない。伝説のボケ殺しとも違う完全無視の極み。ハジケがハジケでなくなる恐怖!

「嫌だわ。アタイ怖い……」

「ボボ美さんは俺が守る」

「天助さん」

女学生ボーボボとヤンキー天の助が小芝居を繰り出せば、

「なんだそのインチキはー!」

ワタアメを両手に握った首領パッチが飛び掛かる。

「お前の髪で真っ赤なワタアメを拵えてやるよ!」

女性の命を猟奇的な食材にすると宣言する恐怖にも支配者は揺るがない。

「二万年使用」

虚空に出現した天使の輪っかから虹色のハエ叩きが出現する。叩きの網目に沿った無数の小さい釘がバイオレンスに輝く。

握ったマキマは目にも止まらぬ素早さで首領パッチをアンダーから打ち上げた。

「ほぐっ」

「二」

途端、どこからか謎のカウントが聞こえる。

「何だこれ、不吉! ぐっ」

「しっかりしろ。首っ」

「二二」

バウンドしたイガグリを介抱しようとした二人も纏めて打ち据えられた。

「とどめです」

マキマは無表情にスナップを利かせたハエ叩きを振るった。悪魔の力にも耐える謎素材は鞭のようになり、三馬鹿の顔面に格子状の跡を刻む。

「二二」

「ゼロ」

謎のカウントに合わせ、マキマが宣告する。

三人は謎の力に捕まった。

「浮いてる。浮いてるよー」

「秘儀、空中散歩」

「動けねえ。何だこれ。何なんだ」

三者三様に、突然出現した巨大な骨に噛みつかれる。相手を規定回数刺すと逃れ得ぬ死を与える呪いの悪魔の力が、ハジケリストの防御を貫通した。

「うばあっ!!!」

手を後ろに組んだマキマが三人にゆっくりと近づく。

「凄いね。まだ息があるなんて」

冷徹な評価を下す。狩りの標的がどれだけ弱ったか確かめる捕食者の目線だった。

ハジケリスト達は、か弱くもしづとい。レンコンよりひどい有様でも、活動は可能だった。

ポーボボは切れた唇から血と決意を吐き出した。

「契約者との約束だからな」

「どんな？」

「お前を滑稽にしてやる約束だよ」

「もう叶いませんよ」

「ひげ！」

首領。パッチが悲鳴を上げる。

マキマの背後には全身に貫通痕を穿たれた岸边が転がっていた。ハジケリスト同様確実な殺害手段を用いられたのだ。

「彼はまだ人間の範疇だったみたいですね」

言外に人外扱いしていたと告白する。コンクリと水中の別なく泳ぎ回っていた相手には妥当な評価だった。

「そんな、全部終わったらラーメン全部載せ行こうって約束してたのに！」

天の助が嘆く。

「ラーメンが契約の対価ですか？」

「いんや、ただの飲み約束」

「そうですか」

マキマは止めを刺そうと彼らに冷たい視線を送る。一度でも敵対した相手には確実な終わりを与える。女帝の気概がハジケ共の背筋を寒からしめた。

## 後編

口元の血を拭ったボーボボは切り札を切る決意をした。

「こうなったら、あれしかねえ」

「やるか、ボーボボ」

首領パッチもあちこち棘が折れた痛々しい姿ながら、目は死んでいない。声に力があつた。

「俺もやるぜ！」

「いや、天の助は留守番」

「留守番?!」

驚愕のあまり揺れなくなつたところてんを放置し、ボーボボは力をふり絞つた。

「鼻毛直拳究極奥義！　ボーボボフュージョン！」

ボーボボの周囲から謎の逆風が吹き荒れ出す。

マキマは慣れたもので死んだ目で推移を見守る構えに入った。だが、手首は程よく脱力している。隙あらば彼らのハジケの矜持事スマッシュする構えだ。

「食え。ボーボボ」

「おう！」

「ぎゃああああ」

飴玉にトランスフォームした首領パッチがボーボボの口へ飛び込めば、容赦なく飴玉をガリガリ噛み砕く。伊達に馬鹿をやって来た仲間ではない。同士討ちなど日常茶飯事だ。

「助け………いってええええ！」

茶飯事………なのだ。

「歯ごたえ抜群。だがトッピングも必要か」

元気に悲鳴を上げる相方にボーボボはご満悦だ。しかし、マキマに因縁を食い込ませるにはもう一手必要。

岸辺は素晴らしき共犯者だが、大義を背負いすぎている。もう少し、小さなスケールで立ち向かう馬鹿が欲しかった。

ボケ倒すのは一人でもできるが、一緒に踊れば世界がハッピー。

幸い、突っ込みもシカトもこなせる彼女をただの仇役に貶める要素はすぐ近くにあった。

そう！ 彼こそは！

「出番だ主人公！」

アフロからマジックハンドが飛び出した！

「俺エ!？」

ダンスマスターコベニの後ろで屍をやっていたデンジは迫りくる腕に思わず、死んでる場合じゃねえ！ と胸の穴をガムテで塞ぎつつ飛び起きるも、足元でふて寝していた天の助に滑り、取っ捕まった。

プルプル野郎の留守番には意味があったのだ！ しばらく出番ないけど！

「ウソだろ!？」

地の文への茶々入れは厳禁です。

「ぐばあっ??？」

謎の空間攻撃を喰らったところで目が白黒させるのを他所に、アフロ男は悲鳴も上げなくなった首領パッチ飴を呑み込み、意気込みを上げる。

「行くぜ！」

「俺死んでるんですけどおおおお！」

いや、んな元気な死人いるわけないじゃん。デンジは誰もが思う悲鳴ごとアフロに呑み込まれていく。

助けを求めるように最後まで伸ばされた腕が吸い込まれると、アフロは蛇みたいに二つに分かれた舌を出し、げっぷした。

「じつと待っていなくてもいいですよね」  
ここだ。

生物の隙の一つ、捕食後の弛緩を見抜いたマキマはハエ叩きを竜巻の向こう側へ躊躇いなくうねらせた。

「え」

だが、必殺の武器は竜巻から生じた腕に先端を掴まれると、ガラス細工のように砕けた。

唾然とマキマが見守る中で、風が薄れ、内部の人物が視認できるよ



うになる。

「……デンジ君」

葬った相手の復活を知った彼女は機嫌を急降下させた。

デンジまんまの姿に、オレンジ色トゲトゲヘアー。心なしか体格も良くなっている。変身を遂げた彼は高らかに名乗りを上げた。

「完成！ デンパッチ！」

ちゃらりー。

安っぽい電子音がバツクで鳴った。

「ボーボ要素どこ!？」

最高得点を叩き出したバーガー定員がきつ、と振り向き、顎に指でV字を沿えたカツコつけない少年を鋭く指差す。

「靴だ」

「分かりづらい！」

主人公交代!?! いや、もともとからどっちも主人公!?! 混乱しきったコ

ベニはパーフェクト達成を称える画面背後に劇画調で訴えた。

戦いのゴングは延び延びになっていた予定の消化から始まった。

「デンジ君。江の島旅行へ行こうか」

「マジっすか。行きますー！」

「うん。行っておいで」

マキマの背後で鎖に縛られたデビルハンターたちが能力を行使する。蜘蛛の悪魔の転移を起点に、蛇の悪魔が大量の骸骨めいた人影を吐き出す。無数の腕にぶん殴られて、デンジは流星になった。

そしてすぐ帰ってきた。並んで通りから近づいてくる影はなぜか三つに増えていた。

「おやつは三百円までって言っただろ」

「いーじやねえか喰っちゃまえば」

「そーじや。ちよんまげは大統領のワシに命令するでない」

「いや大統領制度はこの国にないから」

「なんじやと……」

デンパッチと肩を並べるのは、後頭部にちよんまげが結わえられた苦勞系イケメンに、血の色の角が生えたおこちやま魔人だった。

スーツを着こんだイケメンが、遠足のお約束を丁寧言い聞かせれば、パーカーをワイルドに着こなすおこちゃまが角をにゅつと伸ばして抗議、直後デンパッチと二人掛かりの常識アタックをくらった。

誰なのか脳内照合を済ませたマキマは苛立ちを瞳に乗せた。独裁気質が計画倒れを容認できないと内心で波を立てる。

「どうして二人が生きているのかな」

遙か高所から見下ろす支配者と、アホ面をした回答者の視線が交錯する。

「砂浜掘ったら出てきました」

デンパッチは常識の外で生きている。ハジケリストの表層を理解したつもりでも、下には下がいる。死体利用権力系ヒロインには理解できるものでもない。

「デンパッチ流究極奥義『生ま、いいか。よろしくなア!生世世』だつてさ」

タバコ加えたイケメン系眼帯お姉さんが、バカ騒ぎに便乗してやってきた。訳知り顔で原因を説明すると、ぷわーと煙で器用に輪っかを浮かばせる。

「やつ。アキ君。デンジ君。パワーちゃん」

「お久しぶりです」

「よー、姫パイ。何か月ぶり?」

「オヌシ、出待ちしておつたら。ワシの目は誤魔化せんぞ」

パワーの鋭い指摘を誤魔化すように、姫野が奢るよと、硬貨を自販機に入れる。サンタクロース襲来で死んだ者たちが、自販機の取り出し口から膝を抱えて転がり出てきた。

「拾い食いはしていませんか?」

「どこや(ん)??」

「チエンソー様、最高!」

「コベニちゃん。転職したんだね」

デンジの私生活を監督したがった眼鏡は石の悪魔に契約内容の見直しを訴え、スバルは肩が凝つたと腕をぐりぐり回す。サメの魔人は地面に潜り込んで崇拜対象の一メートル後ろに背びれを浮かせた。

暴力の魔人はペストマスクめいた仮面からでも分かるやさしみを溢れさせ、エプロンで涙を拭うコベニを嬉し泣きさせていた。

姫野はお茶目に頭を掻いた。

「あちやー、ファイバーしたよ」

「ワシもやるー!」

「もちろん俺も!」

「姫野さんどころか地獄で殉職した人たちまで」

デンジのような特例を除き、不可逆の死が曲げられている。有り得ない現象に警戒を強めるマキマの眼下では復活ファイバーを巡ってジャンケン大会が始まっていた。

ジャンケンで負けた姫野はマキマを見て、挑戦的に笑った。

「行け!・ゴースト!」

不可視の拳がビルの外壁を這うように迫ってくる。

種の割れた手品など怖くもない。マキマは天敵になりうる蛇の悪魔で迎え撃とうとして鎖の先がないことに気付いた。「てめーほらホントによー」

繋いでいたはずの女性は蛇の悪魔にヘッドロックを掛けていた。民間デビルハンターの沢渡アカネだった。

「よっくも私の頭ポリ○キーしてくれやがったなあ」

手足のないサンショウウオに似た蛇の悪魔がもがいていた。巨大な口が無数の組んだ腕で牙を表現する不気味な悪魔なのに、締め上げる女性のほうがよほど悪魔っぽい形相だった。

「秘密なんてねーんだよ! ああん!」

小さな学生から小遣いを巻き上げるチンピラのように悪魔の頭をガタガタと揺らす。

蛇の悪魔はもうだめだった。一つがダメでも次はどうか。解決手段を模索してマキマが手繰った鎖はことごとく空を切る。

気付けば頭を下げるスーツの面々が並んでいた。銃撃事件や、世界各国の刺客対策で散っていった公安の精鋭たちだった。

「あ、マキマさん私たち京都帰りますんで」

「ホント特異課はまともなやつがおれへんなー。アキ君気いつけや」

「はい。ありがとうございます」

鎖をチェーンカッターで切った早川アキに感謝して面々が去っていく。いつの間に背後を取られていたのか!?

「皆死んでいたのに」

ゴーストの拳が頬にめり込む。一発いいのを貰ったマキマは意識が明滅する中思った。

「ワシが大統領じゃ!! ……いや、大統領は一人しかねんのじゃった……」

そして、再度踊り出したコベニを眺めていたチエンソーマンの口から臓物を覗かせた黒山羊頭の悪魔が這い出てきたが、魔人の自分を見てすみやかに引っ込んだ。普段常識なにそれの彼女でも、大統領が一人だというべきなのは配慮に入っている。変なところで知恵が働く彼女はもしかすると一番の貧乏くじを引くのかも知れなかった。

高所から落下させられたマキマは土埃をはたく。契約で損傷はどこかの誰かに移ったが、服や汚れはその限りではない。ぐいと口元を拭えば、袖口をシロップではない紅が濡らした。

「死者と生者の境を曖昧にするなんて」

「そんないいもんじゃねーっすよ」

支配者の覇道を阻む勇者のようにデンパッチは彼女に向かい合っていた。

誰も彼も、次々マキマの支配を外れていく。悪魔の力の適用範囲が広すぎた。終末の四騎士たるマキマですら、世界を支配するのに随分と犠牲を出したのに、ハジケリストどもは馬鹿を感染させて世界を書き換えている。

今日の敵は今日のハジケ。明日にやみんな乱痴気騒ぎ!

実にふざけていた。

だが、デンパッチはデメリットもあるのだと言う。

「所詮こいつはハジケリストの悪魔の夢。奥義を解いたら、元に戻っちゃいます」

「つらい過去にこだわっても仕方ないよ」

都合の良い希望などないのだと、マキマは真理を説く。片方に何か

を乗せれば、もう片方が浮いてしまう。釣り合いの取れない天秤。それを現実と言うのだ。

「俺、少年漫画の主人公なんで。後に何も残らなくても、歯ア食いしばらなくちゃなんねえんすよ」

「そう。なら素手で殺してあげる」

「能力なしっすか」

少年漫画らしく、タコ殴りにして滅ぼしてくれる。マキマの思惑を受け取ったデンパッチはチェンソーを駆動させ、ファイティングポーズを取った。

「いや、普通に寿命与えて復活させられるから」

一大決戦開始！ の前に、褐色肌の村人に胴上げされながら海パン姿の天使が余計な一言を挟む。

マキマはつんのめった。

「あなたの能力は奪うだけじゃありませんでしたか？」

問われた天使はうーんと小首を傾げた。突然できるようになったことに理由を見出そうとしばらく悩み、「ハジケリストって凄いな」いい加減すぎる回答を寄越した。

「馬鹿になれば大体のことができる。能力を反転させて、吸い取った寿命を与えたりね」

「融通がきかないからあなたは他人に触れられなかったのでしょうか？」

「まともに考えてください」

知能指数低下程度で悪魔の生態と結びついた能力がバージョンアップできるなら苦労しない。マキマは呆れた。

「脳みそフル回転でこの答なんだよ」

「馬鹿ってことは俺の後輩か！」とハジケ的先輩風を吹かせたがるデンパッチに「いや、僕の方がデビルハンターの先輩だから」と牽制しつつ、頭のわかさを指先で回転させてうそぶく。村人から南国の花輪を首にかけてもらった天使はご満悦だ。

「よしんば寿命の譲渡が可能でも、分け与える寿命が足りないのでは？」

「総理との電話で、日本国民の寿命を好きに配分してもいいって契約

して貰ったよ?」

「はい?」

マキマは素で驚いた。日本国の総理は彼女の身代わりに日本国民の命を差し出しはしたが、引き換えに齎される被害以上のモノを入手するしたたかさがあった。ハジケリストなる胡散臭い輩と契約するはずがないのだ。

「そこに電話ボックスがあるから」

「小銭どうぞ」

「あ、うん」

いつの間にか出現した電話ボックスへデンパッチからもらった十円片手に入る。

「もしもし、総理ですか? マキマです。天使の悪魔が有り得ない契約を結んだと言ったのを耳に挟んだのですが。……え。嘘じゃない、ですか? これからの時代は男の娘? 正統派美女もいいけど変化球で特色を出していくべき? ちなみに、更新期日迫っていたから君との契約天使君の分とすげ替えた? 何言っているんですか総理? 契約に期限切れはありませんよ? ……そうに違いありません。」

「……総理? もしもし? 総理? 切らないで下さい!」

「とりあえずサムライソードから全部引き抜くかな。寿命無限だし」

「ああああああああ」

「モミアゲ! しっかりしろ!」

折角地球帰還したのに、無慈悲な天使に目をつけられた犠牲者一号の断末魔がボックスを揺らす。

マキマは外の喧騒を遠い世界の出来事のように聞いていた。

有り得ない方法で不死性を無効化された。

総理との会話を反芻し、受話器を取り落とす。通話終了のツーツープ音がやけにボックス内に響いた。

「やります? 最終決戦」

「やる」

デンパッチの気遣いにマキマは拳を作った。勝って、チェンソーマシンを支配下に置いてハジケリスト共を存在ごとくなくしたことにして

みせる。本気でそう思っていた。

「武器がないと締まらないよな。せめてハンマーでもあれば」

「沼ラーメンならあるよ」

姫野は辺りを探す彼に、どこからか取り出した怪しげなラーメンを渡した。

「おお、ハンマラーメン！ これなら！」

ドンブリを肩に乗せ、マキマの頭を狙う。

「沼ラーメン……ハンマアア！」

「えい」

「へぶっ」

軽いジャブで器ごとひっくり返される。

「うばああ。ゲロまずラーメンが目と鼻にい！」

食を大切にするアキですら吐き出すラーメンの汁に侵され、デンパッチは春巻きのようにぐるぐる回って悲痛に悶えた。

「負けた」

「いや、当然じゃろ」

いじめっこに敗北したガキンチョのようにべそをかくデンパッチに。パワーの辛辣な指摘が突き刺さる。

彼女の見解こそがただ一つの真実だった。

「もういいかな。チエンソーマンがいないデンジ君にかまっているほど暇じゃないの」

一撃入れたマキマはシリアスの女王の威厳を取り戻しつつあった。今ならもう一回世界征服を完了できそうな気配すら醸し出している。

一気に不利な空気になりデンパッチは呻いた。

「せめてブレードがあれば……！」

「おんなじことになる気がするがのお」

パワーは腕を頭の後ろで組んで呆れる。

しかし、頼れるお兄ちゃんは違った。

「期限切れの食パンならあるぞ」

「食パンブレードじゃん！ アキ！ でかした！」

「チョンマゲ!？」

「パワーが指ほっちゃんしたジャムも付けてやろう」

「すげえ！ ブルーベリーじゃねえか！ インテリジェンスが上がっ  
ちまうぜえー！」

「ワシがジャムを指で搦って舐ったじゃと！ そんな事実はない！

デンジじゃー！」

「なら、その口周りはなんだ」

「ハッ!?」

ぎやいぎやいと正当性を主張していたパワーが押し黙ると、デン  
パッチは私の番だと勇み立った。

「ジャムをたっぷり塗りまくって。最強パン！ 出来上がりだぜ  
！」

デンパッチはどこが武器なのか疑わしいジャムが山になった食パ  
ンをこしらえた。蕎麦屋さんの配達スタイルでマキマにぶつけよう  
とする。

「この一撃で殺してあげる」

おっととと不安定に揺れるバカに、マキマは必殺の気合を込めた拳  
を送った。

支配の悪魔が引き絞った拳が胸を穿つ寸前、デンパッチがパンを縦  
に構えた。当然落ちるジャム。マキマの拳が風を巻き、ジャムを弾き  
飛ばす。しかしそこにオレンジ髪青年はいない。既に彼女の背後  
にいた。

「全粒粉スラッシュ。空蝉の型ー」

残心したデンパッチが食パンブレードを下ろす。

「うっ」

一拍置いて必殺技を反応すらできず受けたマキマが崩れ落ちる。  
連動するように空が割れ、雲一つない快晴になった。

さんさんと照りつける太陽の下でデンパッチは童のように喜んだ。

「勝ったー」

「ウソじゃろ!?!」

パワーはデンジともう一人を轢殺した時みたいに大口開けて驚い  
た。



「勝つのは自然な流れだ。全粒粉は体にいいからな」

「最強パンと関係は!?」

うんうん。保父さん目線で食育を語るアキに、パン初心者のパワーは混乱した。

全粒粉だの健康志向だのは彼女に早すぎる。食べ物が美味ければ、ワシ幸せと嫌味なモミアゲに反論できる単純さが仇となっていた。主導権を取り返さねばと、普段使わないインテリヘッドが唸る。

「いよっし、第一部完！ 焼き肉行くか！」

「肉は全てワシのモノじゃ！」

しかし、合体解除したデンジが取り出した焼き肉割引券の束に理性を飛ばした。

「もういや……」

マキマはうなだれていた。ジャム塗れのパンで斬られて負けたのだ。気分がそう簡単に戻るはずもない。

傷跡はそこらに散らばるハジケ共の血で治ったが、心の傷は塞がってはいなかった。

得てしてそういうときほど追撃が来るものだ。

「「「シユツシユツシユツシユツ！ シユシユシユのシユツ!!」」」

止めを刺しにか、機関車ごっこでバカどもがやってきた。

アフロとイガイガが傷など忘れたと元気いっぱいに寄ってくる。

「変なところでナイーブだな」

「二部でやっていけないぞ」

支配の悪魔の目に光が灯った。天敵はいつだって生き物の本能を呼び起こす。

「あなたたちのせいですよ」

ある程度は調子が戻ったが半ばただのやけっぱちだ。合体解除したボーボボと首領。パッチが野次るのに、打ち返す言葉も力がない。

「人のせいにするのは半人前の証拠だ」

「ほら、地獄直行便の切符。ぬ、の透かし入り包みに入ったところてん弁当もつけるよ」

やはり再生した岸边がさらっとマウント取ってくれば、天の助は才

ブライトにサヨナラ！ させに来た。

「いりません」

「受け取らないと、田中脊髄剣！ して貰えないぞ」

「私田中じゃありませんので。そもそも、脊髄剣つて死んでますよね」

一同はびゅーと口笛を吹く。

デンジの新しい家族はナユタなのだ。黒髪のちびっこなのだ。ほら、在庫整理つてあるじゃん？

「誰も味方がいない」

十割自分が原因でもメタクソになったら、庇ってほしいものだ。だが、周囲との対等な関係を築いてこなかった彼女には特定の味方がいない。

それでも、拾う神はいるのか、ワンと聞きたかった声が届けられる。

「チェンソーマン？」

彼女の前にやってきたのは回転刃が鼻先から出ているオレンジの犬っぽい生き物。ポチタと呼ばれるチェンソーマンの一形態だった。

ニコニコした顔つきで、バカみたいに尻尾を振っていた。

「私を迎えに来てくれたのですか？」

本当につらいタイミングで好きな相手に会った。これだけで運命を感じるのに不足はなかった。

しかし、現実は厳しい。

「ペッ」

「あっ」

抱き寄せようと伸ばした手に、ブルドック染みた、けっ、の顔つきになったポチタが唾を吐き捨てた。

支配の悪魔は、デンジへのアプローチから分かるように割と恋愛少女的な面がある。ゴミ扱いはきつい。マキマは心がポツキリと折れる音を聞いた。

「ポチタ。焼き肉行くぜ」

「ワン！」

威嚇顔から甘え顔へ百面相したポチタが去っていく。

膝について、足元の石ころを数えだしたマキマのもとに人影が差し

た。

「何の用？」

デンジだった。

人間性を否定する深さで心を抉ったのに、まだ彼女に笑いかけてきた。

「ガラガラくじで余った景品らしいんすけど、良かったら来ませんか？」

お大臣つつーらしいっすよこれ。扇状に広げた割引券を見せてくる。

「ワシはマキマが来るべきでないとお告げを聞いた！」

「お告げの悪魔はまだ地獄にいると思うけど」

すかさずパワーが遠回しに拒絶するも、マキマが瞬時に撃墜する。ナニナニと他の面々も寄ってきた。

「私い、マキマさんに絡みたいことたつぷりあるんだあ。ね、アキ君」

「いや、俺はあんまり」

「うわ、性根もイケてるー！」

雰囲気酔った姫野が悪絡みしようとして、アキに惚れなおす。

マキマはわちやわちやし出す周りに波紋を落とすように呟いた。

「どうして」

いろんな意味の籠った「どうして」だった。それにデンジは竹でも割るように返す。

「俺からマキマさん誘うってしたことなかったなって思いました」

デンジは居住まいを正す。これから関係性を新たに始めるのだと意気込みを注入した。

「改めて言います。俺と焼き肉食ってください」

「デンジ君」

「はい」

「これ、期限昨日までだよ」

間違い防止のためか、チケットは全て、ジョーク品であると両面に赤インキの記載があった。

「ウソォー！ 恥ずー！」

足元ならぬ手元がおろそかになっていた勇者は、恥ずかしそうに顔

を覆う。

好意も失敗もありのまま。どこまでも自分を隠さない彼にマキマは肩を軽くすくめた。

初対面の日。パーキングエリアで伸びたうどんを手ずから食べさせて上げた。冷めてコシもないだろうに、気遣いからかデンジはおいしいと表情を綻ばせていた。

「デンジ君は健気だね」

かつて在った平穏なひと時。その日と若干ニュアンスを変えた評し方。

込められた意味は彼女にしか分からない。

きつとそれで良かった。

結局、もろもろのお詫び込みでマキマの奢りになった。

「めでたし。めでたし。ですね」

「オヌシ誰じゃ!?!」

「中村です!」

ちよつとおセンチになりそうな背後では、眉毛の濃い短髪野郎がカットインしたのにパワーがひどく狼狽していた。

最終的に、皆バカになって、世界は救われた。

悪魔の前で一芸披露すれば大体地面にぶつ刺さった大根のような犬神家状態になるので、こぞつてお笑いが広まった。

人種も宗教も、わだかまりも全部飛び越え、誰もかれも笑った。

天使の悪魔は笑いすぎて地獄に生まれ直してまた帰ってきた。

デンジは世界一おもしろー男としてギネス記録を作り、ポチタは胃の中に詰まった悪魔どもを吐き出してギャグに沈め、戦争の悪魔を泣かせた。

アキと分離した銃の悪魔すら今では水鉄砲の悪魔に追っかけまわされている。

そんなアキはいつの間にか復活した弟とキャッチボールを始め、パワーはナース服で献血を募っては血を盗み飲みしている。

マキマに至っては出番がなくなったナユタに命を狙われる日々を

過ごしていたりした。

どこかの屋台でおでんが煮込まれている。岸边は珍しくモグラにならず、席に腰かけていた。

「そういや、お前らに払う対価って何だったんだ？」

「ふっ。それを言うのは煮え切らない奴だけだぜ」

同席した三悪魔の一体がサングラスを無駄にきらめかせた。

「いや真面目に払わないと俺死ぬから」

「安心しろ。俺も払っていない」

「そういう問題か？」

契約悪魔に毒されつつある髭スーツの袖をちよいちよいとデカイ鼻毛が引く。

「ねえ、芋羊羹は？」

忘れ去られていたキング鼻毛だった。首領パッチは身代わりに人形を置いて部下たちの面倒を見に行っている。

「芋焼酎でどうだ？」

「いいねえ」

ボーボボに瓜二つの顔が綻ぶ。すかさず、対抗意識を燃やした青色が謎飲料を売り込んできた。

「ところてんどリンク（アルコール入り）はいかが？」

「ズルズルしてヤダ」

なんか鼻水みたい。

構成物質を全否定され、人型はアイデンティティに甚大な損害を負う。

「うばあー！」

「天の助えー！」

今日もハジケ共は通常運転だった。  
ちゃんちゃん。